

寄稿

バトラー先生との出会い

長谷川和夫

Kazuo Hasegawa

認知症介護研究・研修東京センター名誉センター長

1988年秋の夜のこと、突然アメリカからの国際電話がかかってきた。バトラー先生からで1か月間、客員講師Harold Hatch Lecturerへの招待であった。これがバトラー先生との出会いの始まりである。

1989年4月3日から約1か月、ニューヨークマンハッタンMt Sinai医科大学附属病院老年医学センターに滞在させて頂いた。旅費、滞在費はフリーで1,000ドルが支給され、週に1回Mt Sinaiとその関連研修施設で講義することが義務でその間は研究として何をしてもよいという条件であった。

4月13日のこと、ニューヨーク郊外のTarry Townという町で行われたBrookdale Foundation主催の研究会にバトラー先生に随伴して出席したことがある。中央駅から電車で40分位かかった。西海岸からも有名な学者が参加し、日本の厚生省班会議的なクローズドの研究会だった。その時、Taxiのなかでの雑談で、バトラー先生が質問してきた。“君は週の何時間位を教室の運営資金の調達のために使っているか？”

僕は特別のイベントを開催するときの様な場合を除くと、資金集めに努力することは通常は無いとっていい状態であったから驚いた。彼は今まで午前中はずっと資金集めをしていたという。弁護士を同伴し裕福な方を訪問し寄付金をお願いし、代償としてその方のお名前を銀の板にはめて記念として掲げる等の契約をしたと語る。いつもとはやや違った表情から、なかなか陰の御苦労もあったのだと思った。

センターに滞在中は特に膝をまじえて学問上の議論をしたり、一緒にツーショットの写真を撮る時間もなかったが、折りにふれてお話しすることができたことは、幸いであった。御自宅のマンショ

ンがセントラルパークをはさんで病院と反対側にあったが、夕食にお招き頂き、今は亡き御夫人の手料理を8才位の御息女と共に頂いたこともあった。また滞在の終わり頃に、バトラー先生始めセンターの主なスタッフを市内の日本料理店にお招きして、感謝のスキヤキパーティをして喜ばれたこともあった。終わったあとそれぞれが帰宅の途についた時に、バトラー先生自身が路上に出て高く手をあげタクシーを呼んでいた姿を想い出す。これがすばらしく恰好よかったのである。とに角彼の長身で微笑みをたやさず、常にやさしいまなざしで人に接する姿には華があったと思う。女性にもてただろうことは言うまでもない。

同じ年の1989年8月第4回国際老年精神医学会にもお招きして以来親交が続いていたが、直接お目にかかることはなかった。およそ20年の年月が過ぎて2009年9月21日はからずも国際長寿センター (ILC) の企画運営委員としてバトラー教授よりお招き頂き、コロンビア大学公衆衛生学部(リンダフォード学部長)で開催された第1回ディナーサロン“アルツハイマー病と高齢社会”に参加させて頂いた。参加者は米・英・仏・日そしてドミニカ共和国の5か国からの19名で、医学、公衆衛生学、心理学、経済学、行政職、製薬企業および家族会等の錚々たるメンバーであった。ワインを傾け、晚餐を楽しみ乍の会議、バトラー先生の短い挨拶のあと、始めから意見を順番に述べ合っ、それに討論が加わるという形式であった。

趣旨は人口の高齢化が進むに当たって増加するアルツハイマーに対してどのような国際戦略があるのか、そして新薬開発のための研究資金や活動費などの財源をどうしたらいいのか等であった。私は地域ケアこそがこれからの中心的戦略であり、アルツハイマーになっても安心して



2009年、執務室での博士と筆者

住むことができる町づくりと介護人材の育成こそが要であることを強調した。発言の直後、Dr. 長谷川の意見に強く感銘をうけたという賛意を示した方がいらして、討論の流れを変えたと感じた。いずれにしても日本からの情報発信として伝えるべきことを伝えたと思っている。

その翌日、日本から随行したILC日本の大上真一氏とILCアライアンス事務局長の大迫政子氏とともにバトラー先生の執務室を訪問して、親しく話す時間が与えられた。あの20年前、1989年にお目にかかった時と全く変わらない容姿、態度、あたたかい人柄とセンスに感銘をうけた。

彼は1976年、“Why survive? Being Old in America”でピューリッツァー賞を受賞している。邦訳書で『老後はなぜ悲劇なのか』として1991年メヂカルフレンド社で出版されている。多くの統計資料や情報を根拠にして老年の課題を先駆的にとりあげた名著で、その明快性と洞察性によって、現代の老年問題を予言していたと思う。例えば老いることについての固定的な偏見、Ageismの指摘、“高齢期で失う最大のものの一つは選択肢がなくなること”とか“老いると貧しくなる豊かな社会”と

いった矛盾を指摘する表現は、まさに現代における高齢者のおかれている状況を正確に示している様に思う。Why survive? 年をとると悲劇が待っているのに生き残っていく価値があるのか? と問うているのである。

本書のまえがきのなかで彼自らの生い立ちについて記述している。彼が赤ん坊の時両親は離婚したため母方の祖父母に預けられた。幼少時代は祖父の養鶏の手伝いをして過ごし、その死後は気丈な祖母に育てられた。この様な高齢者に育てられた彼が一念発起し、医学を志し、そしてひたすらに老年医療に進んだ原点が示されている。やがて老年精神科医として名声をはせる様になり、初代の国立老化研究所の要職を果たし、Mt Sinai医科大学老年医学部長に就任し、その後も卓越した見識のもと国際長寿センターの統括者として令名を高めるに至ったことは、まさに天からの与えられた職命であったかと思うのである。

私にとって短い期間ではあったが、バトラー先生との出逢いはかけがえのない貴重な体験であった。